

^ 5
4452

門 5
號 4452

5
4452

不出
同
豐
地

田喜書

田喜書

昭和九年
十月一日
購

坂知義之章

題芭蕉翁國分山幻住庵記

何世無德士以心隱為賢也何處無山川風

景因入美也間讀芭蕉翁幻住庵記乃識其

賢且知山川得其人而益美矣可謂人與山

川共相得焉迺作鄙章一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺 古松鬱兮綠陰清

茅屋竹椽終數間 內有佳人獨養生

滿口錦繡輝山川 風景依稀入俳城

此地自古富勝覽 今日因君尚益榮

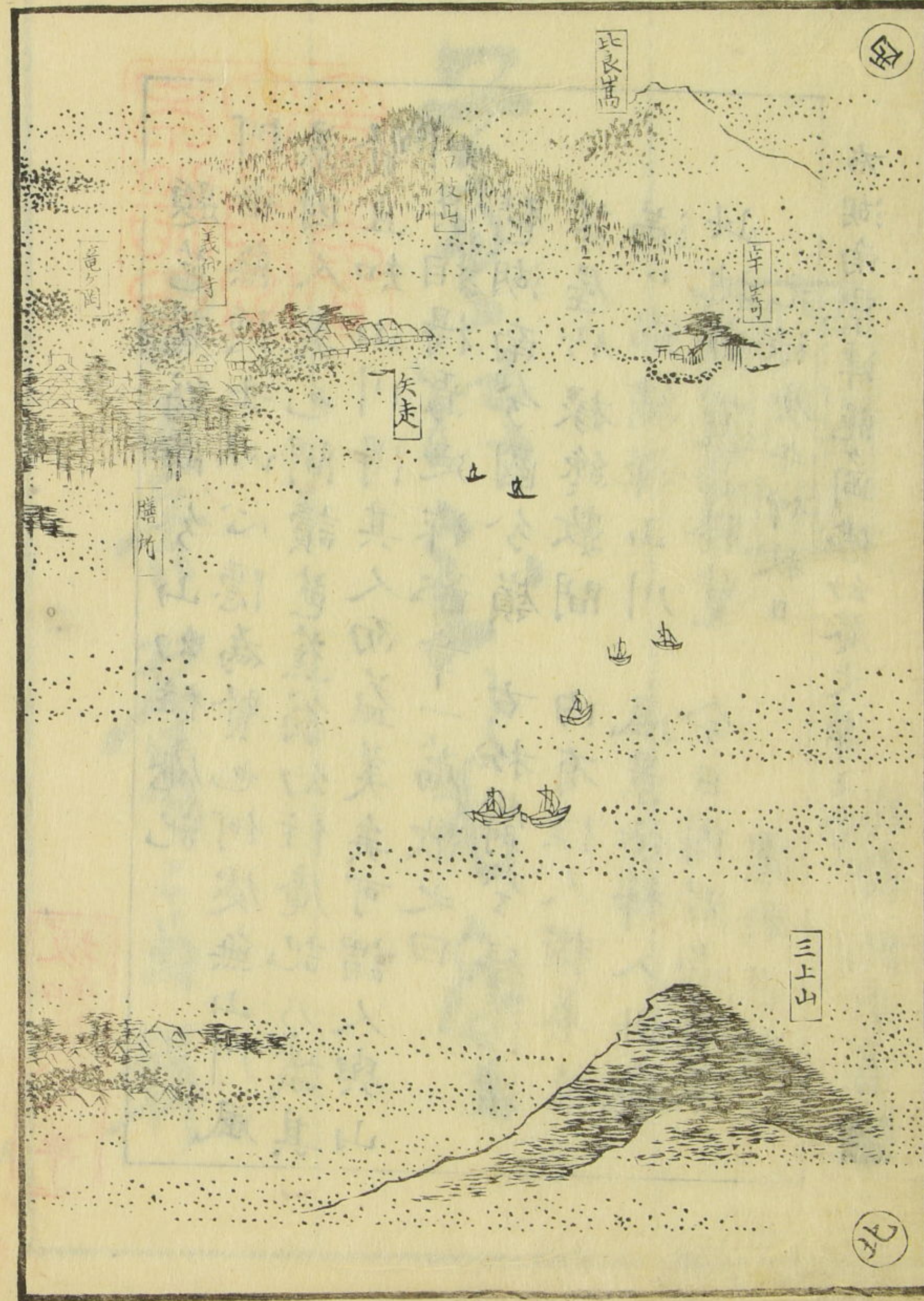
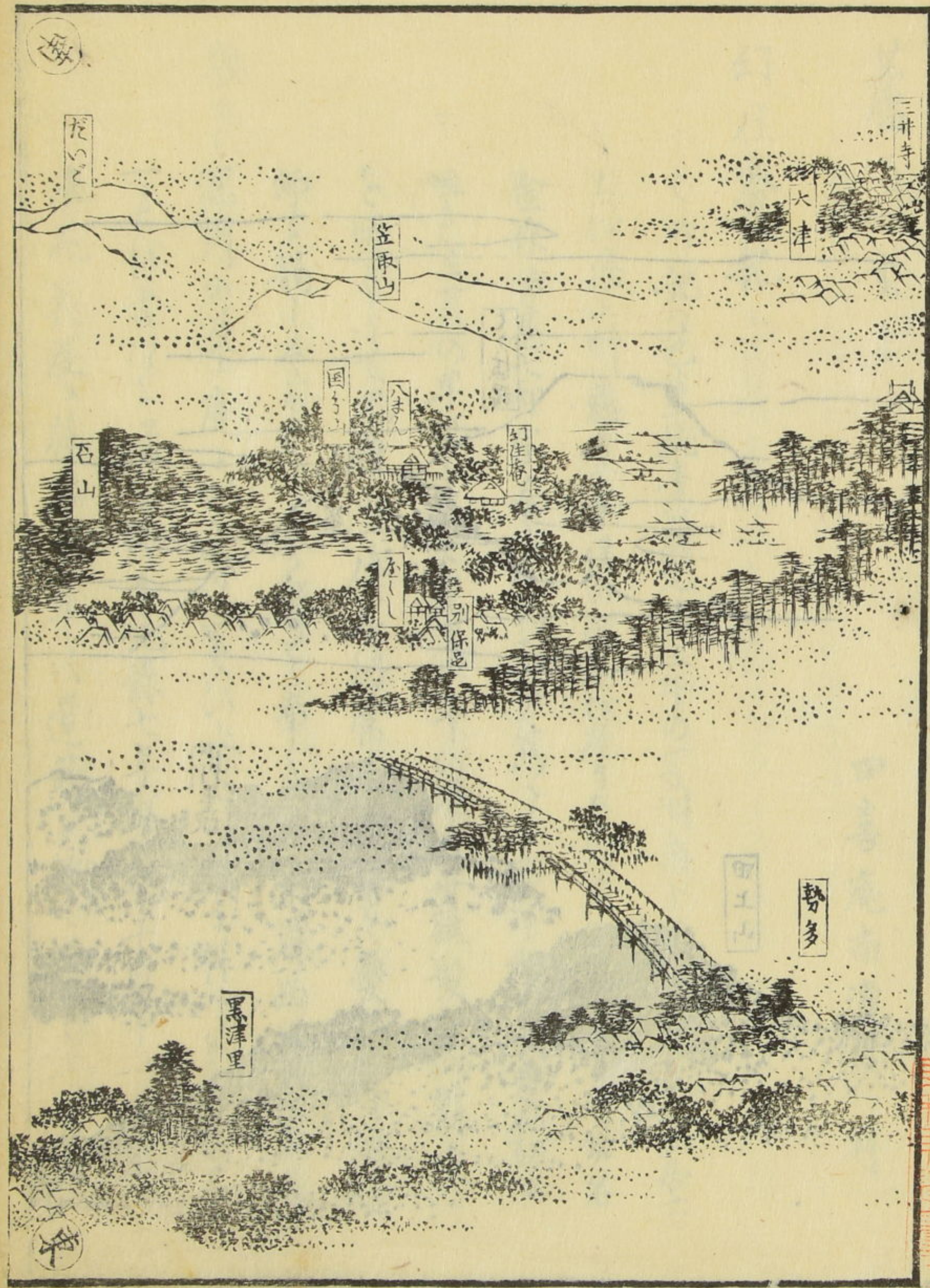
元祿庚午仲秋日

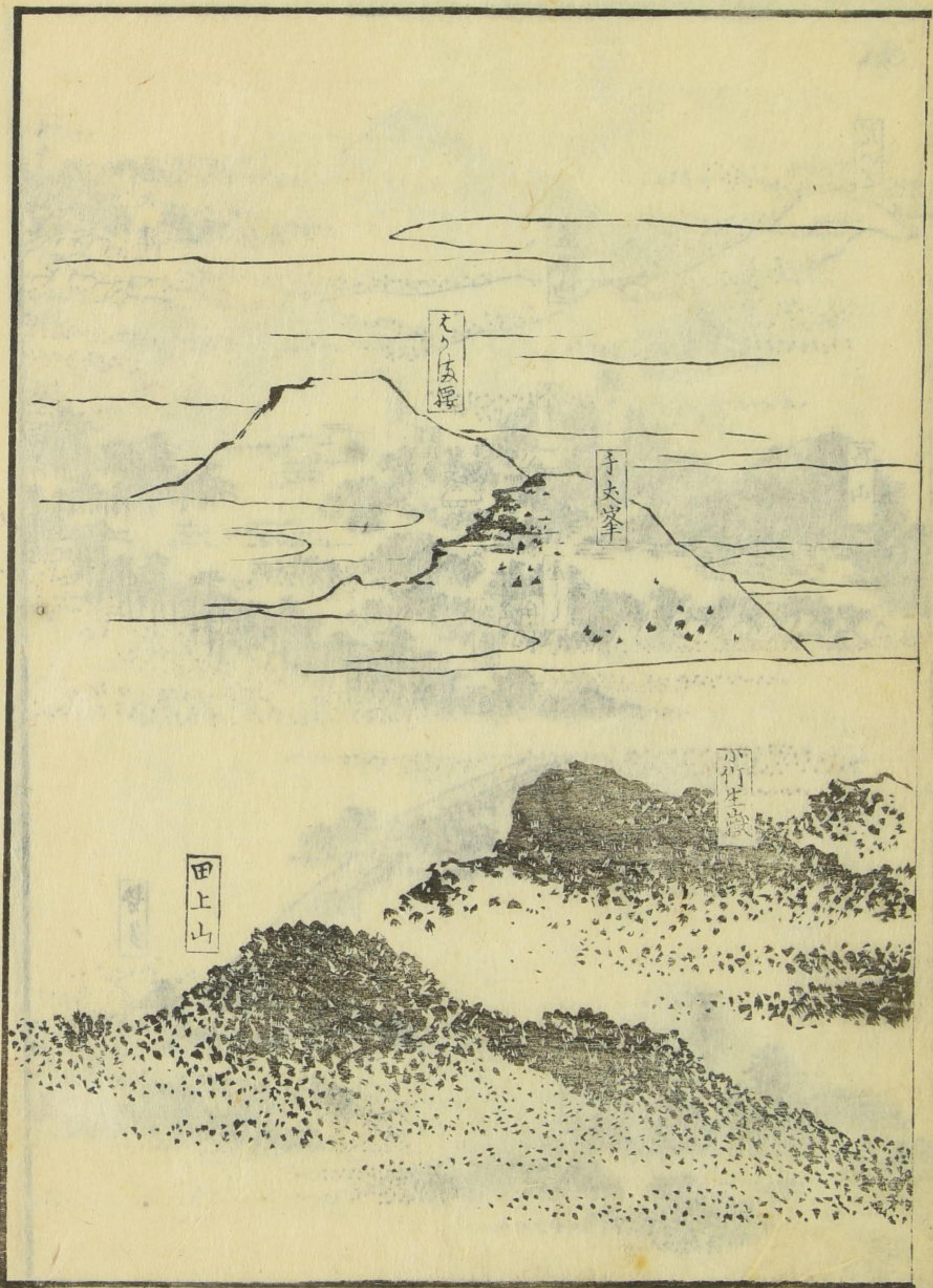
震軒具艸

右湖南粟津龍岡佛幻菴大草之章

筠齋紀鼎書

印





葦廬の一もと

田喜庵南溥護物輯

幻住菴記

この記は芭蕉枕書翁元録三年の夏湖南卜居の記也芭蕉居士
 其伊陽上野藤堂某侯の家士松尾与信の宗行の子にて幼名
 金作右基七郎宗房と云兄を羊廬と云家を嗣と云保の初に
 生主君の早世と遇て寛文六年の頃遁世薙髪して北村季吟
 を師として風雅の一体を以常と老荘を愛し佛頂禪
 師を謁し其もとと参禪を事とて東漂西泊して東武
 深川の草庵まかほにまゐり水火の難を苦み先らまゝ
 一とて古くは歸り終る元録七年戊の冬十月十二日撰陽
 浪花花屋の旅亭に卒以遺辭を依て骸を江南義

仲寺に葬る續扶桑隱逸傳枯尾花芭蕉繪詞あり
くくえり

題号 幻住菴記

江及石山の奥國分山に閑居の折の記ありて其まがはる
二つものりりり。和漢文藻に云幻住菴の記と云もの三通
有記と賦との差ありと其翁と年四十七歳の時也と
更按世説いさゝ遠へと奥羽行跡ハ元録二年にて四十八歳也
幻住菴の山居と日三年午の夏めて四十九歳ある處一也奥
の細道と旅の物語とありてやまはるなり長月六日ありと
伊勢の迂宮おろまん又舟とありと有和漢年契と元録
二己年伊勢迂宮と有又この記中五十年居近き身ハ
奥羽象潟の暑き日小面を焦しと何と云ハ其行跡の

後ありて五十歳の最の事かきと四十九歳に叙し終り幻住
庵瀨田より石山寺の中程に標石有る後よりハ丁程有る
其舊蹟とつと存せり
庵 釈名曰草以為圓居曰菴菴菴也 以自覆菴也
記 説文曰疏也疏謂一々分別記之 廬カ云記者以備不忘
蓋叙事如書史法也叙事之後畧作議論以結之廣韻曰
記誌也と云史記日記の類を云事を其終まつて述す
を記ふ也長明每名抄に假名よのなる哥の序ハ古今集
假名の序を本と日記大鑑の序にまを習ふと云
大鑑の序にまを習ふと云
古今集の序にまを習ふと云
大鑑の序にまを習ふと云

石山の奥岩間のうらうら山首

けしめ其住居ありてより住る大くくを述べてこの記の
大概を述るる序文也石山の奥と云うは、いかに初子と云
下まつを云來處し、さて発語は石山のうらうら山首と云
山ハ湖水才一の風色を統て近江と云云處すと云く云はる
を人のほとくは、んや、つ、近江と云と石山と書出せり
と又面のもや、ふて書本を考る處、この武敏の六十帖を
述るるもけ、たよ、ま、の、ま、是、扱、ひ、合、し、て、の、後、語、本、ハ
岩間山正法寺江忍慈賀郡元正帝朝越天德養澄建立
本尊、子手觀自在西國順禮才十二番巡拜所也事盛衰
抄草山集才五子許く、

石山集才五子許く、

石山よなりくるのさちや林のそ、
尾張 蒼鼠

三日月ら石山寺のうらうら、
下総 木人

石山やものつと、
江ナ 青岐

蟬さくわ坂ともつらぬ岩なる、
雨篁

國分山とらふこのうらうら山首のうらうら山首

國分寺ハ聖武帝の草創也今類聚して跡のこ也、
山の名のうらうら山首、
系抄と云。續日本記天平九年詔曰、
國分寺大后所勸也、
挾持菩薩二軀兼令寫大般若經一部、
天平應真仁正皇大后光明崩云、
天平國分寺大后所勸也、
元亨釋書以天平九年詔為國分寺權輿

凌宵や田々りまひくふ寺 下毛 星谷

雪の日は湖水を北の園に寺 江中 春光

高き昔を月影にふり 豊前 葛居

走る鳴鶴を川園に寺 因及 禾木

ふらふら花流る。やれの柳哉 杜蒸

流るる子に流るるふり 野格

三曲二百歩あり

爾推曰山未及上曰翠微九山遠望之則翠近之則翠漸

微故曰翠微。同疏曰未及頂上在旁陂陀之處曰翠微

一説山氣青縹色故曰翠微也。公羊傳註古六尺為步三

百步為里。砂竹抄曰一步六尺四方也。崇忌曰疏三崇

兩足曰步日本法三尺八寸四方周二尺日本六寸四方也。三曲

より六七曲九折あり云曲あり。あるはさく寸六に於

山をみるるを文脈よく述べて

八幡宮もせぬの神体を弘徳の言像との唯

の家は甚忌ある事を兩部光をわしり利益の

慶をいひしをわしりもまてとる

八幡宮を國分村の生土神也近津尾八幡宮云。諸神鎮

座之記曰山王七社之聖天子者八幡大菩薩也乃至本地阿彌陀

如來也。於海志曰近江國滋賀郡聖跡八幡一御前八幡大菩

薩者今聖天子是也唐老僧取聖天子者阿彌陀八幡大菩薩

之分身云。山王七社之才三神真聖天子唐老僧取本地

阿彌陀聖跡正哉吾勝尊法号八幡大菩薩

東見記曰日本神道有三種一云唯一宗源唯一之二字二條
院御時雖曰加之但吉田兼延如之以為得其實也二云兩部
習合三云本跡緣起此是社家者流禁中謂之曰下祓隨
役此外有天子之神道此神道者知之者秘而不言羅山
先生耳語而相傳焉曰理當心地神道也。唯一宗源古來所
傳純一而不雜者也。兩部習合自最澄空海始云。兩部
習合弘法傳教慈覺智澄。佛法附會神道以胎金兩
部配于陰陽以佛神為同一體者也。玉勝間攝の落葉の
八部ニ云天下の神社のうち神人のつくる社を俗に唯一といひ
法師のつくる社を高教と云又兩部神道と教る一なるれども
兩部は佛の道は密教の胎藏界金剛界の兩部と云ことを
神の道は合せざるを高教習合の神道といふこと其兩部を

以て神道は合さるるなり也此の字もてんは屋神と
佛とをけりといふ兩は此の字もてんは屋神と
は此の字もてんは屋神と
神の道は唯一あるはもとより此の字もてんは屋神と
ての字もてんは屋神と
唯一の義もといひかざるはいふべき僻なり
○老子經和其光同其塵。和其光同其塵ハ結縁の事なり
といふ語曲にも云く出さる
曰比る人の信てさるる色といふかきさしむ能
志の信たる信を信すて一草の戸の信を道根
無窮の事なり信根もて信を信すて根程外に云
を信す

日ころハ人の訪てきりしきハ云々を根より破る
 云々勢自法は破るのさびしきと云々出さる
 妙吉今 西行
 昔任人語ある事蓮の葉は月のかきほ
 日ハ。癸心集の事一のち執事とすむもさし
 是は代人の極家とある事ハ何れ破き両よく云
 及京根根改
 胡寺の勢の傍とてハ軒のさしむも根のさしむも哉
 寂蓮はゆ
 入すきとてハも考もぬ古事と程のさしむもつとちりき
 さしむもおまじのさしむもさしむも世を道とてさしむ
 く愛よかくもんとぬりふ下んをふく先と
 幻住 庵よりいふ事ハの傍何系ハ勇士菅沼より
 曲翠子の伯父よか人けりし事いまハハと路はさしむ
 昔よ成とてまさよ幻住老人の名をのこす事と

大にもより草菴のさしむもさしむの一派とて幻住の
 二字とんをさしむもさしむも。曲翠子の膳所本田侯の家士
 あり菅沼外記とて伏諸ハ芭蕉翁の門人也幻住老人ハ
 同山中本多八郎左門探山居士六十七才とて率曲翠子の伯父
 也。韓退之曰士之行道不得於朝則山林而已山林士之所
 獨善自養而不憂天下者之所能安也
 予亦あり市中を去るの十とて破るの事あり 五十年
 中、ちりき方ある中の甚く失はれたるの家とて
 たる事あり

續徳逸傳芭蕉翁傳曰後遇予予頻懷出塵志道世斷變
 延宝六年の頃より三十六歳よりさしむ道世とていふ
 四十九歳の時かきた五十年中、ちりき身と前の十とて

あつちのまじりしもの由垣牛のまじりたる二ツを述る又後あり

奥州風塵^{光俊}石浦のまじりしもの由垣牛のまじりたる二ツを述る又後あり

○前園より約五里親あつちの親をたてて市振の愛をいづ
九十余里海色のけ還りし其日砂を焦し一月波荒て
いとむいりしきまのし真細道江山水陸の風光教を
てと泉涌の方すをせむ又嵐の雲を越えし越後の地す
をいづりて然る城中の園市振の雲よりつらと云

大いし湖水の浪のまじりし鳥のまじりし泉の流をよま
流をよま芦の一もよまうけまのまじりし軒櫓あつちのま
恒根浩と人まじりしおのけのまじりし後とあつちの
山のやうに出ししおのけのまじりし

この一段は草庵のまじりし信濃と人まじりしあつちの也

恒根浩も石浦のまじりしと云又勢をよまよむと人まじりしよま

め石山の真と書出しし流をよま合しては流をよま

子とあつちのまじりし泉のまじりしまじりしあつちのまじりし

方丈記大いし世をよま初し時いづりしはよまおのけのま

いまして五とせし流をよま

湖のまじりし東海まじりしおほろりし

山まじりし湖のまじりし千鳥うね

早乙女のまじりし湖のまじりし

つづつとまじりしあつちのまじりし暑う角

延江

伊勢

同六

加賀

虚白

菊平

珠子

木雄

あつめのおもて候へりてまら敷く

和歌集

層々山行よきるきるはるる松よけわふらん

〇檀鳥

井古今 俊成

山を登りて花をまきつて日くはぬ宿がきりも宿も

上毛

駕舟の酔さめりて候へりて

兩賀

よきるのまらりて候へりて

越後

阜二

とて山行やうつら合はるる山行

系

山柳

一と候のら老くふら候気

如賀

于崖

柳やうき候へりて候へりて

如賀

逸水

夏の系系入る里もまらりて

武蔵

筍亭

あつめ候へりて候へりて

江戸

雪翠

あつめ候へりて候へりて

系

杜末

山幸や門を出入り候へりて

系

万里

昔より候へりて候へりて

系

樺良

胃竟系候へりて候へりて

後右

寸丈

鳴り候へりて候へりて

近江

藏六

屋の松林まの幾らや杜終

伊勢

栗三

杜行さきりて浪のまらりて

倍及

淇石

園葉まらりて候へりて

倍及

可厚

鳥羽香のまらりて候へりて

倍及

一枕

涼川さや意多物く色を信成雲布

草みゆるくくひき夕き如童

字いさくひんく下植清容

善く田美

比叡の山比良比高根より辛崎の松を成るまで

舊事記日枝懐風藻に得叡山とて麻田連陽春作を

んまく傳教大師より兼て比叡山を定まると云まると東鑑

に金子山と云三代実録に大比叡神小比叡神とん中大嶽を

大いえと云西塔と横川の間に小ひえといへる淡海志に叡

山者山城国愛宕郡限峯東方近江西方山城也この山を

桓武帝の勅をまると延暦七年秋最澄山を定むると日枝と

云を叡慮に比るの義を以て比叡山と改めると一乘山

観院と号は弘仁十四年額元年号を勅許有て延暦寺と賜

けはくと畧又都の富士と云

拾遺集

けの意のゆへはゆ物やを都の比良といふれまの

○比良の嵩もこの名よて名よおへる山也比良の大山を云

雪の名を云

万葉集

比良の山は海に近りて峯は袖之はえゆ

○辛崎の松は史にこの松南北三十八間東西三十間枝々四方

半を占むる昔羊伏魔の松もははものやせん

尊朝親王辛崎の松は記にこの松はつとやの大なる事

てはうも妙くは畧又新元稜の寺直れと云畧大津の

比叡を記すぬると云く其はうら松菴東玉雑名直書

鹿島もあまやうきさきはの月下毛 菖竹
 武蔵 有臺
 浦の雲 羅倉
 山家小 梅一
 可景
 河明
 白桂
 久賦
 草の芽もあまの山家小 久賦
 木樵のたき林藪の小田早苗とくさくさ
 夕雲のたき水鶴のあまの美景とくさくさ
 ありくさくさ

城ハ藤州本田侯の居城也。橋ハ勢多の橋瀬田の長橋トモ東轉の
 橋トモ志賀郡東本郡の境也長九十七間中七間小橋長サ
 七間中四間中嶋の間十五間合長百九十六間
新古今 延房
 橋の板も苔むはくさくさあまの世経ぬん流りの橋
万葉集 九
 けしあまの山や海をわたる舟の秋の風の中
 〇笠取山ら山城磯湖の東の山也山一里近江山城の境
夫本集 西行
 三本ころむの山やあまの雨をわたる山
風雅集 秋景
 〇ふもとのお甲
山家集
 山家集
 常々

大井川のついでに流るる水も常流く夕やりのを

水鏡の巻く春 山家集 桐人のくさくさなる心にて春をまなく水鏡あつた

○文選謝靈運詩序天下長辰美景賞心樂事四者難

矣古今集真名亭古天子每良辰美景詔侍臣預宴

遊老^二然和哥^一云 景色のいづろさをけりし美景の中

よ也

景をくさ、法をくさ、法渡西の橋 素志

美に遊むいとくは、二橋多の橋 雄啄

弱鬼の袖力ゆるり せりの橋 完爾

あふぬの流はくさくさ 津田夢一 下総 下七

本葉つぎ人の世もや津田の橋 駿鳥

三日月や弱るもくさくさ 宇橋

弱るのついでに世も替 棹くさくさ 卓堂

流る水もくさくさ 衣月

襟もくさくさ 推花

かきくさくさ 浪花

かきくさくさ 一宵

かきくさくさ 雪草

かきくさくさ 松夕

かきくさくさ

かきくさくさ

かきくさくさ

かきくさくさ

かきくさくさ

かきくさくさ

かきくさくさ

本世のふたふた人の梅の御茶越後 蓬仙
 旅人たはを道系をよふ上陸 里丸
 三々や人の世をみる不苗時 素磔
 疎々々々梅の木のつぼみ苗小 武陵
 果海りちちも出たけり嵐ふ 成美
 ほうほうのつらきふ余一 保吉
 とはくまの草と龍をくわい 申
 霞くの草とやわげりの杭か賀 羊蹄
 々々形をよも山流の量越後 綱堂
 波の濡しきとまをさしとく周天 草吟
 清流のくさくさくさくさくさく近江 志
 常えやきくくくくくくくくくお模 白吟

萩の流は雪をくわい此花あたる江戸 荷七
 山草は雪をかきけり帯々 玉芳
 霞雪はくさくさくさくさくさく 梅夫
 常とくくく川と流り番の中加賀 菊塙
 子を棄る敷の何ちくも鳴水鶴越後 風芝
 多鶴あつ青や雪田の水足伊勢 石海
 田よくさく玉器柄やも鶴なく信濃 昌作
 水鶴なく東の晴きよ水の上江戸 叢
 雨二日水鶴もかくん言ふくく江戸 一司
 水音を料とくくくくくくくく 草雅
 中ふも之上く士峰の付よかきくさく所くその
 古き梅もかりし出くま

つらつら川より西の方より水は流るる

○思はの里ハ能多の真田上山の替か石山より湖水を

履く向也琵琶湖の水黒津石山のるをへく宇治川へ

流る、い古きより、この里の名よて治兼保元元弘應仁の乱

の折くも度く合戦のりよて、まゝくも地所も上思津

下思津とちちてむ度く田上十八のうち也

奇枕二十三 原後重

日 思はの里ハ能多の真田上山の替か石山より湖水を

つらつら川より西の方より水は流るる

右二首田上より問答の歌有けり、田家より著本籍と云る

席とのく。方丈記は、夜をきて夜の床と云

まゝ去來の句よ、思はの里ハ能多の真田上山の替か石山より湖水を

夕立也思はの里吹くへ 士部

吹く思はの里吹くへ 下巻 静齋

吹く思はの里吹くへ 江戸 素由

吹く思はの里吹くへ 悪長

この一章黒津の羽代の歌方葉集よりえんてきは

穿鑿むつ、諸子稿をく、この書い、人か、と

集より、この説、思はの里ハ能多の真田上山の替か石山より湖水を

考る、此章のよ、思はの里ハ能多の真田上山の替か石山より湖水を

切てきて、思はの里ハ能多の真田上山の替か石山より湖水を

思はの里ハ能多の真田上山の替か石山より湖水を

思はの里ハ能多の真田上山の替か石山より湖水を

步履顔注山嶺曰顔廣句曰淮泗之間謂之顔 屣顔ガニ山
 高貌屣セン 説文曰追一曰呻吟也。事大類聚捫虱論夏王猛
 隱居華山懷仇世之念植温入関猛被經袍而詣之面談當世
 之吏捫虱而言旁若無人温察而異之霍林玉露孫仲益
 山居上梁文云衣百結之衲捫虱白如柱九節之筇送鳴而去
 寄語也

形代了風うつゝ流くくく 一茶
 刈薑は居るくも去るくも 風 嵐外
 連翹は掃り出れぬ此茶の味 茶静
 曉を告げぬ此茶の味 上総 茶静
 いと好むは佛よ何く懐のそく風 内和
 温石よさくくいりてくく風哉 内和 憑我

入也此壺くく茶の本侯宿

雪鷲

串くくく人まめあるけい谷の清水を汲てくくく
 始くくくくの雪を懐くく一壺の味へいこの後
 方丈記南の笠の石をきくくて水も汲めくくく
 ら此又修よく似かき此茶の住居のけい茶也。世は修
 昔も西行菴のくくくの清水もて西行上人のくくく
 集西行家集あまのきん西行のくくく
 沸くくくくやまのくくく人からくくく山の水
 くくくく小塔遠君公昔も小茶けいくくくの舊唐を
 印のくくく茶入を懐くくくくのくくく

月く... 昔清水汲... 木海

一 村の... 夜鹿

清水... 赤守

入... 玉蓮

く... 菊社

葉... 梅塙

草... 其破

偶... 雪江

元金

草の戸や... 碓嶺

昔... 持佛... 草庵

方丈記... 安置

梅の枝は眼より紅くけり
守光
善くも家ハさうらの梅の花
箕山
このうけ梅のつる葉の角
梅壽

むはちまきし〜ぬ人〜
何れもまきの翁里の松の赤も入来ておの志の
福くはあ〜免の豆畑かふふ家の中あぬ
農談日記 既子山の松の赤も入来ておの志の

○雲谷雜詠 朱梅庵 野人煮酒来農談日記
梅の枝は眼より紅くけり
燕村
このうけ梅のつる葉の角

猪の毛 五月の夜
免の雪も解けしは
株 黙巢
道のはきやあぬ松の枝
三河 天涯
早蕨の影かゝる免の菊
下毛 首尾
松の叶をゆく冬の月
武系 丘我
田を結ぶ松も柿も喰ひ性
系 与水
福くけり〜松の寺
系 圭別
時や〜山田の福の中
系 世南
ぬの助の通〜福の松の枝
系 榎克
子福の葉や枝〜
下通 迦孫
秋朝

東山の月を待てり
 露谷の香の肩越え風の入口に
 稲の香も月影の中
 吐山

夜座志月を待てり
 露谷の香の肩越え風の入口に
 稲の香も月影の中

○唐詩 夜座不厭江上月 盡行不厭江上山

○莊子齊物論曰罔兩問景曰曩子行今子止曩子坐今子起何其

無持操典

名月のかりくもてり
 可都里
 鮮鮎の鳩もあつてり
 貞松
 雨乃月を待てり
 葵亭
 深山の竹を吹色水
 大鏡
 月影の香もあつてり
 王光
 山影の香もあつてり
 田子
 月影の香もあつてり
 斗菴
 月影の香もあつてり
 希拙

人年似^借き法^借く一年月のつる^註法^註
かき身の^註形^註の^註き^註を^註さ^註り^註の^註め^註の^註時^註は仕官^註惣^註令^註の
地^註を^註く^註や^註こ

こま^註く^註流通^註の^註文^註法^註也^註山^註中^註の^註を^註か^註か^註ん^註は^註い^註は^註い^註
と^註ハ^註始^註の^註や^註を^註て^註し^註て^註人^註の^註か^註は^註し^註と^註ぬ^註と^註ん^註を^註積^註へ^註て^註中^註の^註病^註身^註
人^註の^註倦^註て^註ハ^註る^註を^註象^註と^註す^註を^註釈^註と^註す^註を^註厭^註し^註人^註
似^註て^註ハ^註幻^註住^註老^註人^註の^註と^註す^註は^註ま^註り^註つ^註と^註對^註を^註つ^註つ^註
手^註の^註く^註は^註つ^註つ^註は^註ま^註を^註述^註く^註市^註中^註を^註さ^註す^註
十^註と^註せ^註は^註つ^註つ^註と^註は^註連^註續^註を^註く^註○續^註隱^註逸^註傳^註芭^註蕉^註翁^註下^註
仕^註府^註主^註君^註而^註有^註忠^註勤^註學^註文^註秀^註登^註下^註書^註先^註禪^註吟^註公^註の^註庵^註從^註
事^註つ^註つ^註時^註主^註君^註の^註早^註世^註若^註ら^註け^註し^註は^註官^註を^註絶^註て^註遁^註世^註
以^註○惣^註令^註の^註地^註を^註撰^註集^註抄^註武^註官^註の^註家^註に^註生^註れ^註し^註の^註ハ^註服^註の^註天

を^註を^註屋^註く^註は^註く^註三^註尺^註の^註紐^註を^註ぬ^註いて^註一^註陣^註ま^註く^註と^註今^註を^註く^註志^註
あ^註れ^註も^註名^註利^註の^註後^註地^註の^註存^註ふ^註と^註と^註の^註杜^註律^註為^註農^註山^註澗^註曲^註臥^註病^註
海^註雲^註邊^註世^註已^註疎^註儒^註術^註人^註猶^註乞^註酒^註錢^註○

云^註く^註ハ^註佛^註羅^註祖^註室^註の^註扉^註を^註く^註も^註

遁^註世^註して^註後^註常^註陸^註鹿^註島^註根^註本^註寺^註佛^註頂^註禪^註師^註を^註参^註謁^註して^註契^註
大^註禪^註室^註に^註入^註扉^註息^註三^註頓^註の^註修^註行^註を^註く^註

ま^註この^註時^註は^註鹿^註島^註記^註行^註とい^註ふ^註の^註有^註ま^註と^註漸^註来^註して^註本^註間^註松^註江^註と^註云^註
旧^註友^註の^註く^註く^註く^註を^註て^註世^註を^註あ^註ら^註せ^註て^註根^註本^註寺^註へ^註通^註ひ^註
か^註わ^註く^註松^註江^註と^註云^註ハ^註五^註十^註妙^註錢^註別^註とい^註ふ^註集^註に^註有^註こ^註の^註五^註十^註賀^註
鈔^註を^註集^註め^註伊^註賀^註の^註古^註く^註へ^註記^註す^註は^註此^註の^註集^註に^註未^註系^註弟^註が^註付^註
有^註系^註未^註適^註の^註哥^註有^註と^註の^註か^註ら^註る^註系^註未^註堂^註松^註風^註松^註風^註を^註良^註
紙^註屋^註松^註雪^註其^註角^註木^註と^註云^註ハ^註世^註五^註人^註有^註依^註世^註有^註自^註言^註子^註四^註丁

卯年の事也鹿島の一事もその時の事なり

○佛頂禪師の其后下野那須雲岸寺の真山居りしに云徳
五年未十二月十八日七十六歳に入寂し多し。○惠能禪
師の偈云吾三十而窺佛籬祖室

半くうりかき風雪ふふをせめ花鳥は情を芳く
志くく生涯のはりたくく人あきく終に無能無
才くくくの一助まつふ。

○徳然草 謝靈運の法華の筆授をくくく風雪の思はく
耽くくくと惠遠法師の白蓮社に入給くくく。○杜子銀
生主の篇吾生也有涯而知也無涯以有涯隨無涯殆而已

旅すもくも花せりてもかきくくく人

春の鳥老し小鶉はくくく 應尼

まちきほよあのかぢやくま度 泥中

名も走くぬきのまよ小車や 亀宰

新かく花く磯くくく山家くく 省吾

と食よ小神くくくく 団親

花きの娘あくくくく 敬向

あむくくくくくく 月臺

新 月 鳥のくくくく 石二

花きくくくくくく 菊角

急のきくくくくく 詰明

在明ハくくくくく 其翼

くくくくくくく 尤未

そくそくもあつちあつちのりしや

南歌

谷雄

樂天ハ五臓の神をやふら老杜ハ瘦半り

白詩選聞亀兒詠詩憐渠已解弄詩章搖藤支闌李二郎其

李二郎吟大苦年終四十鬢貫如霜。三体詩元摺寄樂天詩曰

老逢佳景惟惆悵兩地各傷無限神。良基公小夜の原是

は樂天云一人は夕あをばはるるせの故よんをくらん

若くより整のうら白くはらるる色きり。霍林玉露曰

李太白一斗百篇援筆立成杜子美改罷長吟一字不苟蓋二

公亦互相譏嘲太白贈子美曰借問因何太瘦生只為從前作

詩苦苦者子美懷太白曰何時一尊酒重有細論文細細

識其文
續密也

賢良久竹貫のまじかき体もいつまじくまを流しの
すまのあつちあつちのりしや

いつまじくまを流しのりしや

とまは踏はるる也。論吾雅也篇曰賢勝文則野文勝質

則史文質彬彬然後君子注曰彬彬猶班班物相雜適均之貌

先帝のま推のあわらむ其本を

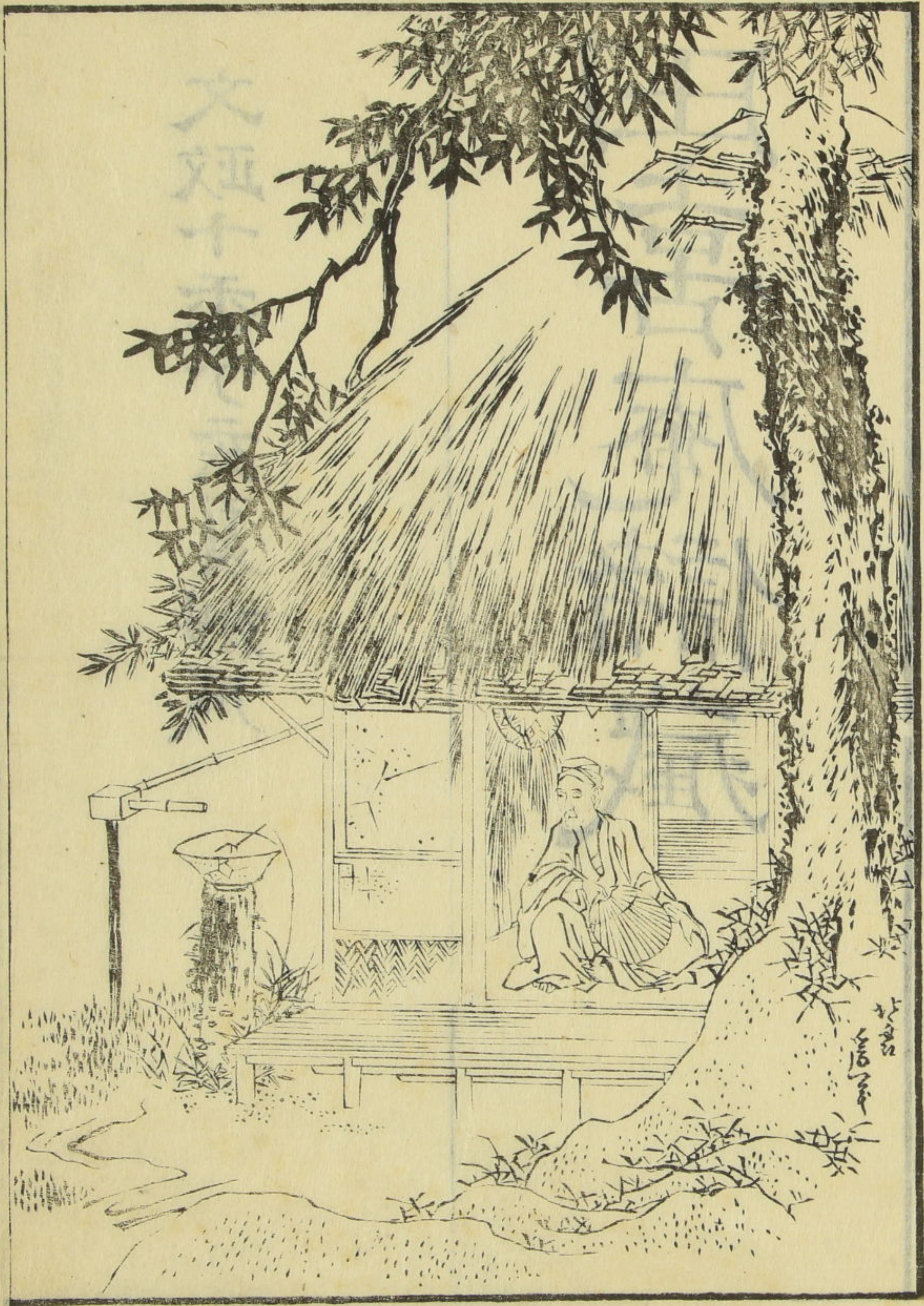
源氏推が本いなる本のまを推のまを推くはらんや

て畧わぬまを推くはらんや

わらわらんや推くはらんや

万葉集七詠苗

山家集向推のまを推くはらんや



大畑十

信長

推の葉よ枝のこむまじり 歌 公 屋為
 川上や雪のふりり 夏あま 秋
 波もあまし 池のくもさや 夏本立 志兮
 水もあまし 推のまじり 東海
 枝の葉みちるふもあまし 四月の菊 可笑
 解あまし 西日くえし 推の家 珠兮
 雪おの推まじり かんこ鳥 一意
 推のまじり 冬あまし 日暮 漢

⑤

文政十年丁亥夏刻成

田舎庵儲藏

